江戸名所圖會

FREER GALLERY OF ART
Library
GIFT OF
Muriel Poland
1987

四谷　四谷御門の外より西の方内藤新宿のあたり迄の惣名なり

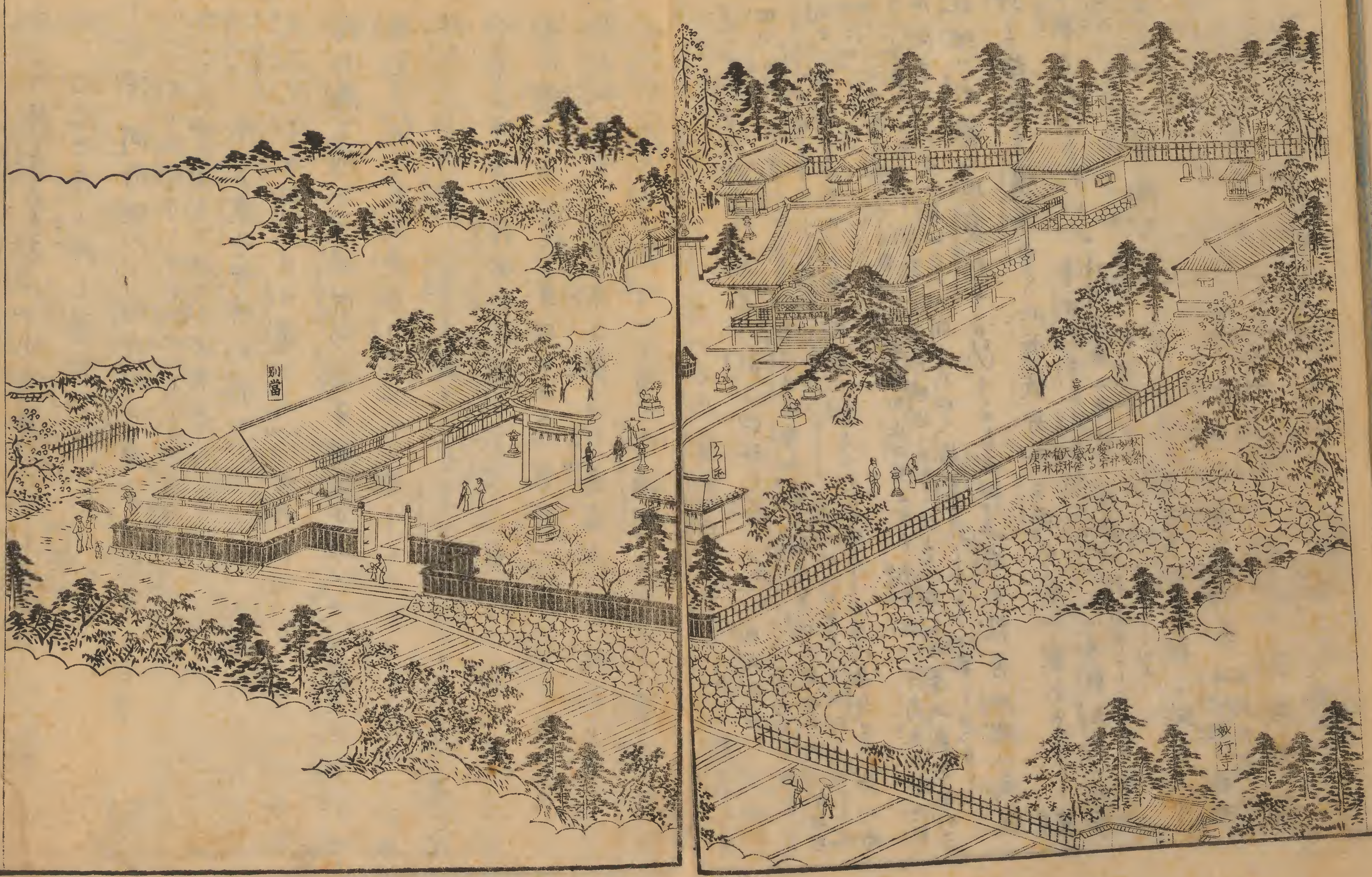
老云此地の四方に谷あり故に四谷と号くると　南向亭云く糀町六七丁目の地と塩町辺地に谷有しが寛永十三年外郭営造の時御堀の揚土を以て東西の両谷を埋めたる故に平地となりしと旧名ハうしなハずしく塩町の入口を今も坂町と字する其故也又古ハ坂なく有りし頃ハ民家一軒ありて夫婦たゞしの人居住せし然に夫婦坂と呼しと云く

或人云れ入国の頃ハ今の糀町両側番町永田町に至て本多弥八郎高木九助両家の下屋敷として下し置れしが共御城近なりしにより市谷の臺此原を永代の御說なく下しなハ表四百八十間に只四人指置られしなり四家とのへりと

此地ハ永禄の頃霞村とよびたると云傳ふ或云往古此地ハ武蔵野に續たりし曠原なく此所彼所に土民の家四家ありし故四家と云へり共いふ　事跡合考に往古今の尾州公御屋敷表門の地及び坂町其余二所共に民家四軒ありしかあり鳴子高井戸の方より四ッ家と称して往来にやすらひとりとあり

牛頭天王社　同所傳馬町一丁目二丁目の間の左側の横小路を入る二丁斗も西にあり　故に俗字して此小路を天王横町といふ　祭神素盞鳴尊　本地佛ハ薬師弘法作紫の一本に四谷の人家開けくるよりの産土神とす　神主ハ芝崎氏　神田明神の神主也　別當を寳藏院といふ号を須賀山宝仙寺の末　中野　祭禮ハ毎歳六月十八日同所石切町　傳馬町二丁目の横町をと云

四谷牛頭天王社



旅所へ神幸ありて廿一日帰輿も地主ハ稲荷明神にして共ニ此地の産土神と崇む 本地ハ十一面観音 行基大士の作

鬼子母神 同所坂の下南寺町日蓮宗日宗寺ニ安置せり 当寺旧糀町清水谷ニ在て乗蓮寺と号を此地へうつされて後藤堂大学頭高次の室高見院心月日宗大姉の法号を採て山を高見と号し寺を日宗と唱へ其家より寺院再興あり 本尊鬼子母神の像ハ日法上人の彫像なりと相伝ふ 文永元年十月三日日蓮上人四十三才母君を拝せんとして旧里安房国小湊ニ帰る母君悦の餘り頓死も上人大ニ歎て生活の祈念をせんとして先徒弟日法上人ニ命して此本尊を造らしむ依て此本尊ニ祈願し奉るニ験ありて忽ち曉蘇生し而後寿を保つ事四年なり 鎌倉住人鎌田氏某此霊像を伝来せしが本尊の霊示によりて享保十三年当寺ニ安し奉るといへり

妙典山戒行寺 同所南ニ隣る日蓮宗にして延山ニ属せり 常唱題目 寛永の頃迄ハ糀町一丁目の御堀端ニありて修行の庵室なりしが近隣宮重氏庵主と共ニ力を合せて遂ニ一寺となせり 当寺の日貞師ハ山本勘助晴幸入道道鬼斎が孫ゆへ延山日悦上人の徒弟也 寛保中八十余歳にて遷化せしる 当寺ハ明暦ニ至りて此地ニ迁さる 總門の額ニ妙典山と書せしハ朝鮮国李彦の書也 此所の坂を戒行寺坂又其下の谷を戒行寺谷と唱へたり

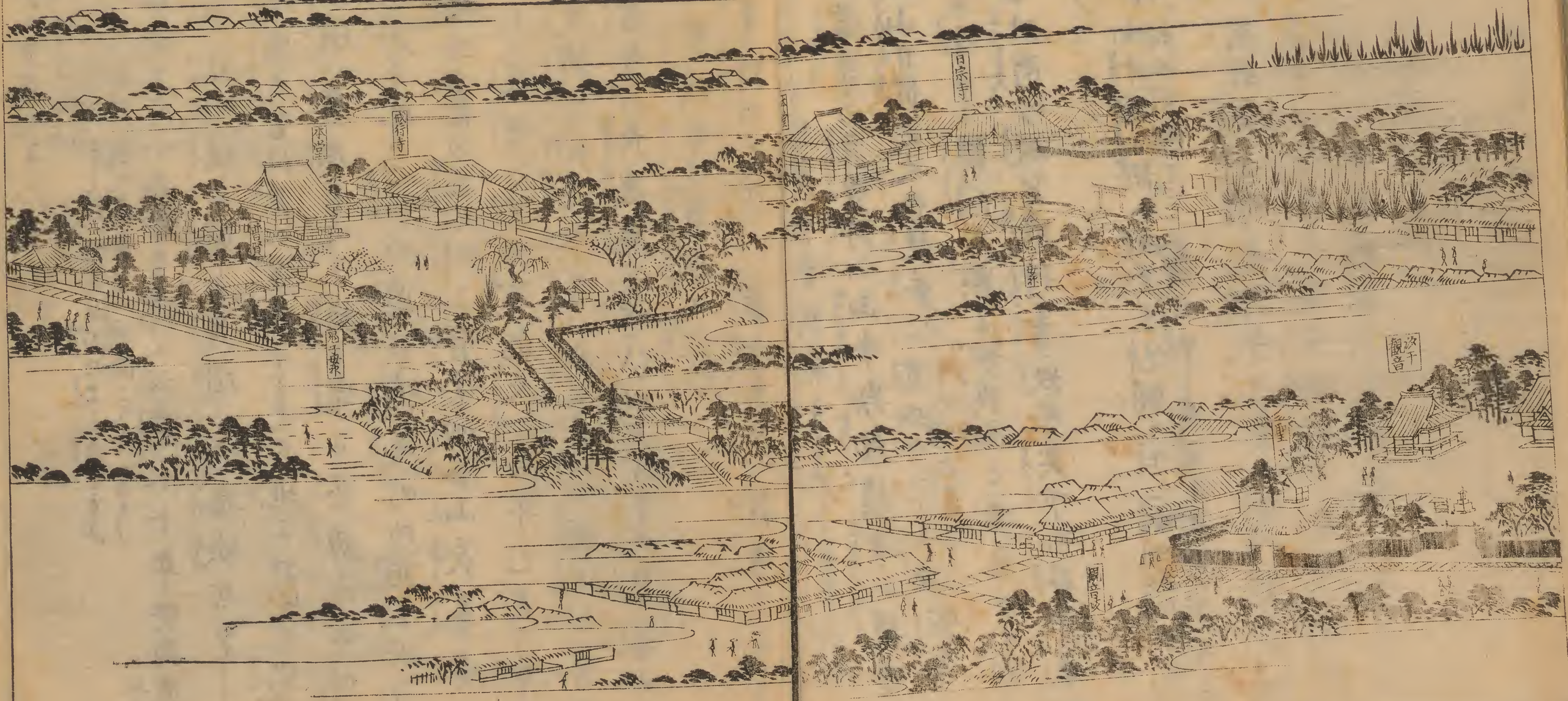
分身鬼子母神 寺中圓立院ニ安置す 定朝の作也 始四谷北伊賀町永田安齢といふ医師の家ニ伝来せし由来ハ長けれハ爰ニ略して記さず

汐干観世音菩薩 同所南寺町戒行寺の裏の坂口真言宗錦敬山真成院ニあり 此本尊ハ越後国村上義清が守仏ニして其末流村上兵部入道道楽斎大坂御陣の時上杉景勝ニ従ひ奥州米沢より彼地ニ趣く 後江戸ニ帰りて当寺ニ収むるといへり 或人云く此本尊ハ塩踏観世音とも号く村上天皇護身の尊像なり依て村上肥後守頼清常ニ崇信して後堂宇を造り安置せり 大坂御陣のころより村上

日宗寺

戒行寺

汐干観音



覺玄齋當寺第三世看心ニ機与へし當寺ニ安す

本尊聖觀音作者詳ならず一尺斗の石の上ニ立せあふ此臺石潮の盈虚ニハ必湿ことなり

忍原

同所四谷通りの小名あり傳へ云寛永十年癸酉武州忍の城を松平豆州侯ニ賜ふ其頃ハ御番城なりしかハ勤番の面々御家人を江戸へ召帰されし此地ニおいて宅地を賜ふされと其頃ハ廣原ありし故ニ字ニ忍原とそ呼しと也忍川と唱ふる地ハ四谷の通り傳馬町の西ニあり

篠寺

同所塩町三丁目の左の側ニ有至四谷山長善寺と中しる禪林なりしく篠寺ハ其異名也天正三年乙亥の草創にして開山ハ文叟憐学和尚本尊ハ釋迦如来脇士ハ普賢文殊と傳へ云當寺ハ長善庵と呼ひ形ちるもの草菴なりし満地小篠のミ繁茂せり寛永の比此邊御鷹狩のとき嚴命ありて篠寺とよのはらせ

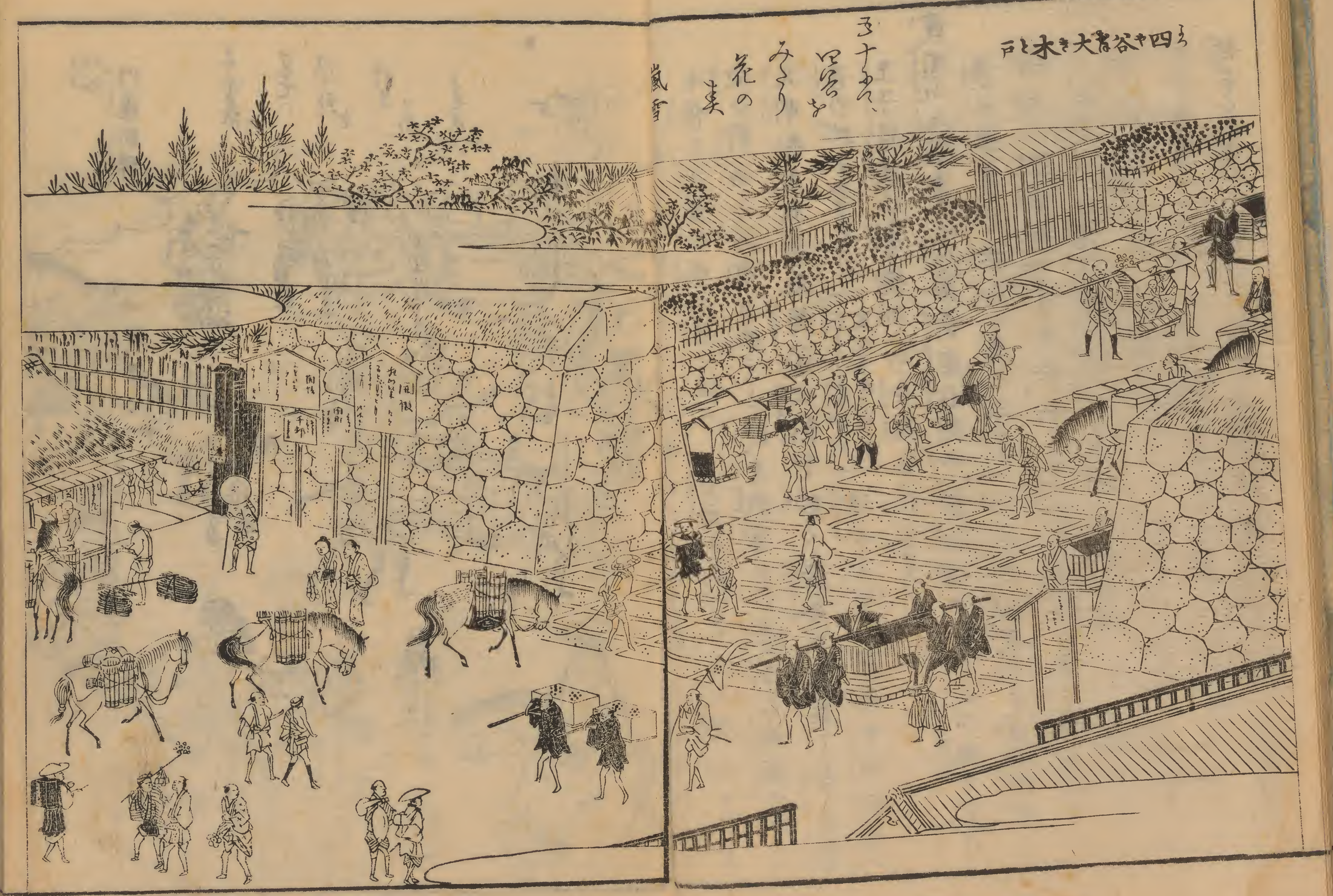
篠寺といへるハ四谷塩町の通り道より左の傍にあり長善禪寺と号く昔御放鷹の頃当寺ハそろの庵室にて満庭小篠のミ所せく繁茂せしハ篠寺とよハせたまひしより字となりぬる今も堂前方三尺ほどの小篠の隈ありて其證を永世ニ標せり

なし此地を寺境になせしより後此名あり故に其證として今も
堂前に方三尺斗の地に小篠の隈ありて總門の額に笹寺と書
せしハ永平寺兼天和尚の筆なり

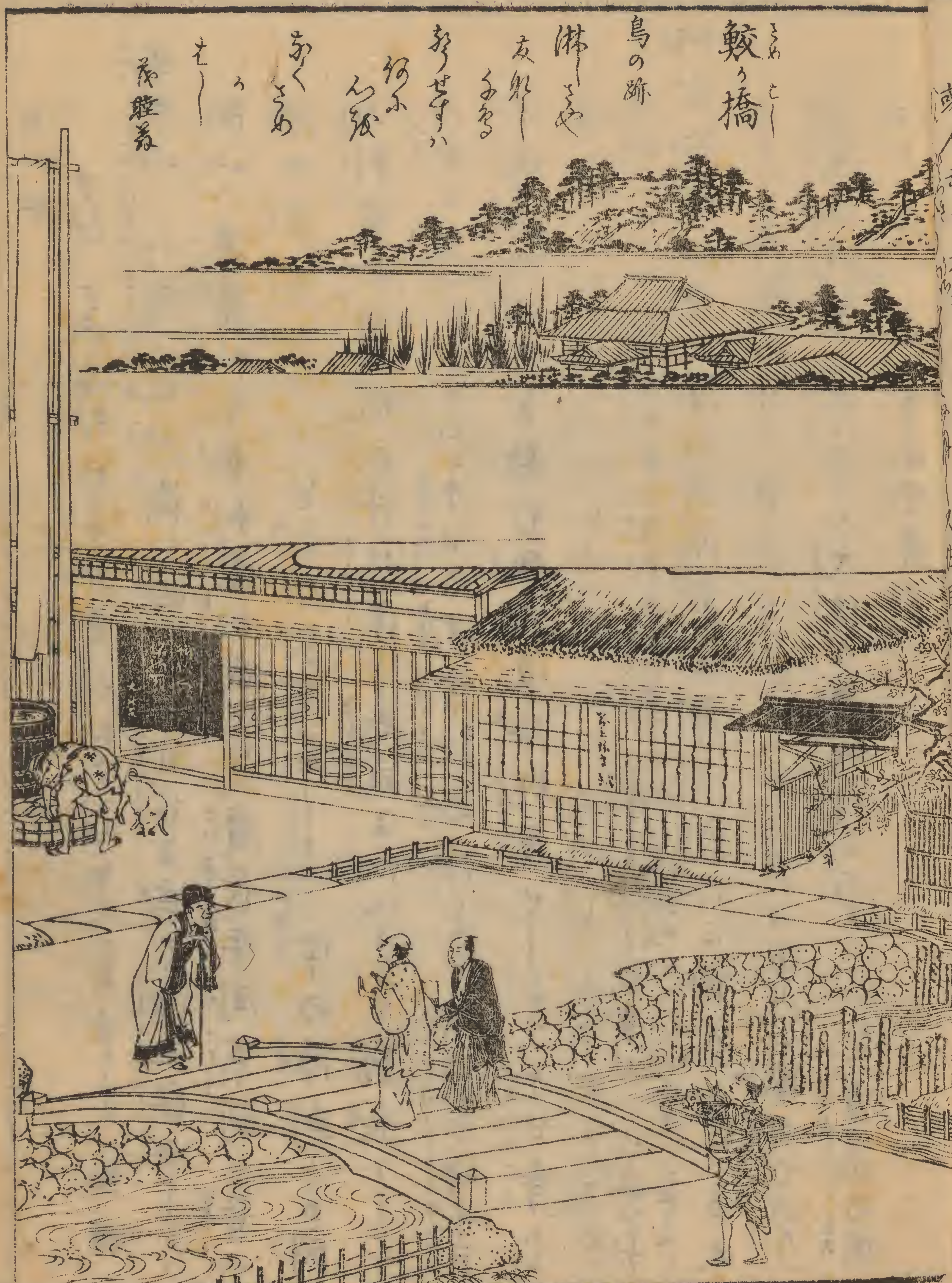
四谷大木戸 又大関戸に作る 甲州及ひ青梅への街道なり 土俗云霞ヶ関
或ハ旭の関など云と 御入國の頃迄ハ此地の左右ハ谷ふかく
一筋道あり此關にて往還の人を糺問せらるゝ近頃まて江戸
より附出せし駄賃馬の荷物送状なきを通さゝりしとなり
今も猶駄賃馬の荷鞍なきをハ江戸宿又ハ荷問屋等より手
形を出して通るも其遺風あり 此故にやこゝに番屋ハ町の
持なれど突棒指股錑わを飾置る是往古關のありし時の
遺風なるへし又同所西の方に往還の道を横ぎりて石橋に
下を右へ流るゝ小溝を櫻川とよへり

内藤新宿 甲州街道の宿驛なり 此地ハ旧内藤家の第宅の地なり後町屋となる故に名とす
日本橋より高井土迹の行程凡四里餘なれハ人馬共に労
を依て元禄の頃此地の主人 官府に訴へて新に驛舎を取立る
故に新宿の名有り然れども故有りて享保の始廢亡せしを
又明和九年壬辰再ひ公許を得て驛舎を再興し今に繁
昌の地となれり 此所より高井戸へ一里廿五町あり 追分といふハ同所甲州街道八
王子通及ひ青梅への分道なれハなり

霞関山大宗寺 内藤新宿右側中程大木戸より二丁餘西に有り
浄土宗にして縁山に属せり本尊ハ阿弥陀如来にて恵心僧都の
作開山念誉故心学玄和尚と号す昔ハさゝやかなる草菴なり
しを寛永の頃内藤大和守重頼此地を賜はりし時此地に
住る道心者ありしに重頼若干の地を与へられしが廣齢なるを
以て大宗なりと云しかハ重頼とりあへずさあらんにハ寺号を大宗と
付よとありしより号とすと 當寺牌堂の本尊弥陀善逝の像ハ


四谷大木戸
嵐雪

四谷内藤新驛



鎌倉佛師の作なりといへり　齊藤伊勢守二親菩提の為と記してありとぞ此齊藤といへるハ代々鎌倉に仕へし齊藤禪門
浄圓ヶ嗣門の内に沙門正元坊ヶ造立せる所の銅像の地蔵なり
江戸六地蔵の第二番目なり

護本山天龍寺　同所追分より南の方甲州街道の左にあり
濟家の禪崖にして本尊千手觀音開山ハ春屋和尚なり當寺
其先ハ遠州の天龍川の辺にありしを後江戸に遷し牛込に
ありしが天和三年癸亥二月十六日火災にかゝり竟に此地に移さる
延宝の江戸図に依て考ふるに今の牛込肴町徒歩町の
西馬場のある地其旧跡なりし今も元天竜寺前といへり
たり　境内に地蔵
堂と觀音堂有り又構の内に一里塚有り

鮫河橋　紀州公御中舘の後西南の方坂の下を流るゝ小溝に
架せるを云今此辺の惣名となれり里諺に昔此地海につゞき
たりしかバ鮫のひのぼりしゆゑ小名ともとしいへり　謬説とするにたらじ
或人云く天和二年公家の所記録に上一木村鮫ヶ橋とありと云々　然る時ハ此
佐目河に作る千駄ヶ谷寂光寺鐘の銘に鮫ヶ

鳥の跡
さひしさやなれしちとりも郁せねハ何ふんをかくらめかなし　茂睡

永固山一行院　鮫河橋の西の方千日谷に在りて浄土宗なり開山ハ源蓮社本誉利覚和尚といふ慶長年間草創ありて昔ハ僅の草庵なりしを永井家開基して一宇の浄刹となり開山利覚和尚ハ則永井信濃守尚政に仕へたりしが剃染して此地に庵をむすひ千日の間常行念仏をなして結願の時千日不退転の回向を勤む依て道俗群集せしより千日寺と唱へ又此所を千日谷と呼ぶなり　紫の一本といへる冊子に鮫ヶ橋を渡りて信濃原へ行谷を千日谷といふとあり永井家の屋敷ありしなるべし　今ハ信濃町といひ又永井原とも云と云々

阿弥陀仏銅像　權太原浄家長禪寺境内に在り高さ五尺なる仏像の脊に應永十四年丁亥八月廿五日と彫付てあり旧東本願寺の仏なりし大坂の御城内にありしを寛永の頃

權太原
長禪寺

千駄谷 大神宮 寂光寺

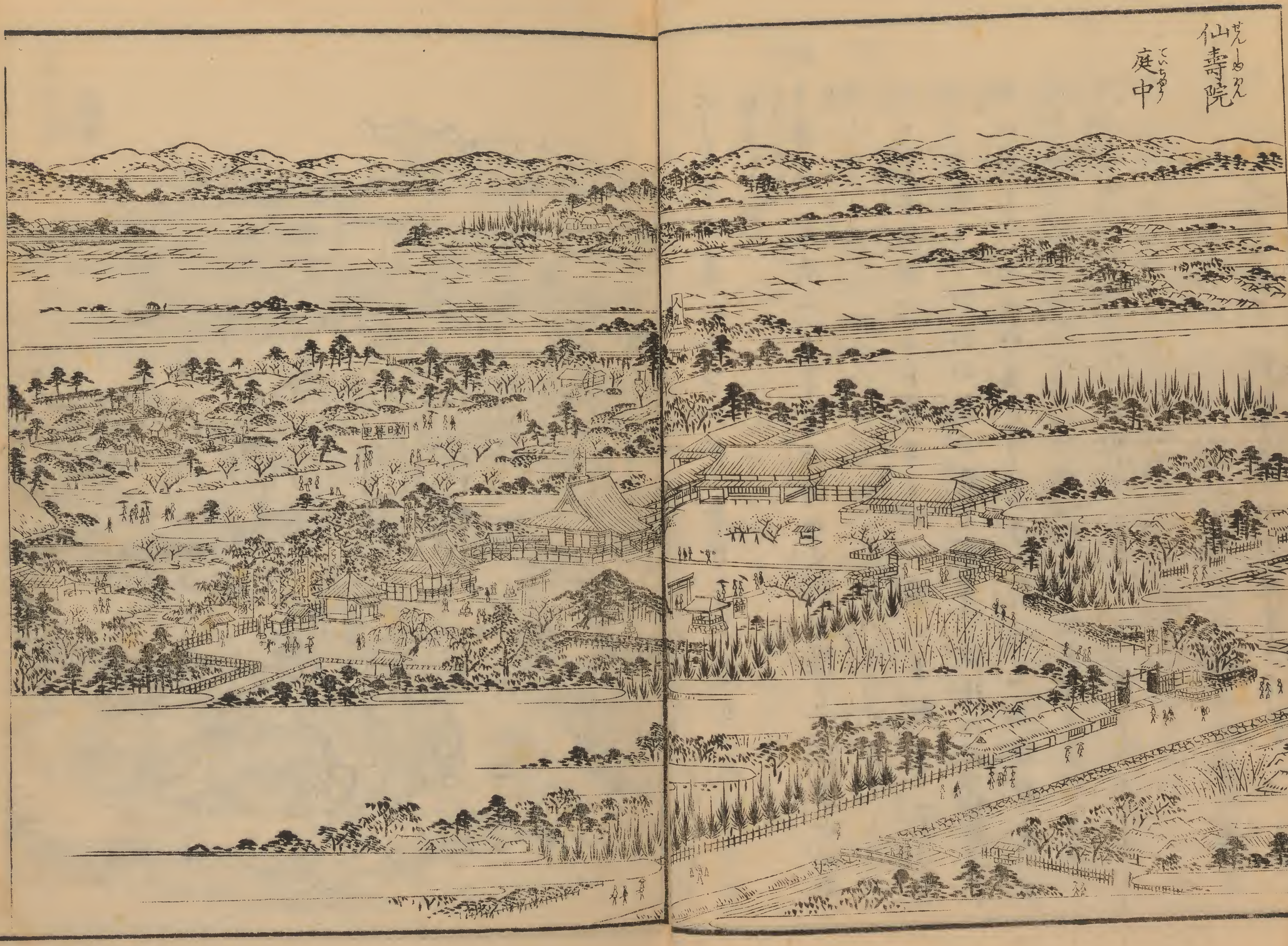
按ずるに應永十四年ハ足利将軍義持の時世なり佛躯こゝかしこに穴あり疑ふらくハ昔兵乱の時に損せしものならん歟

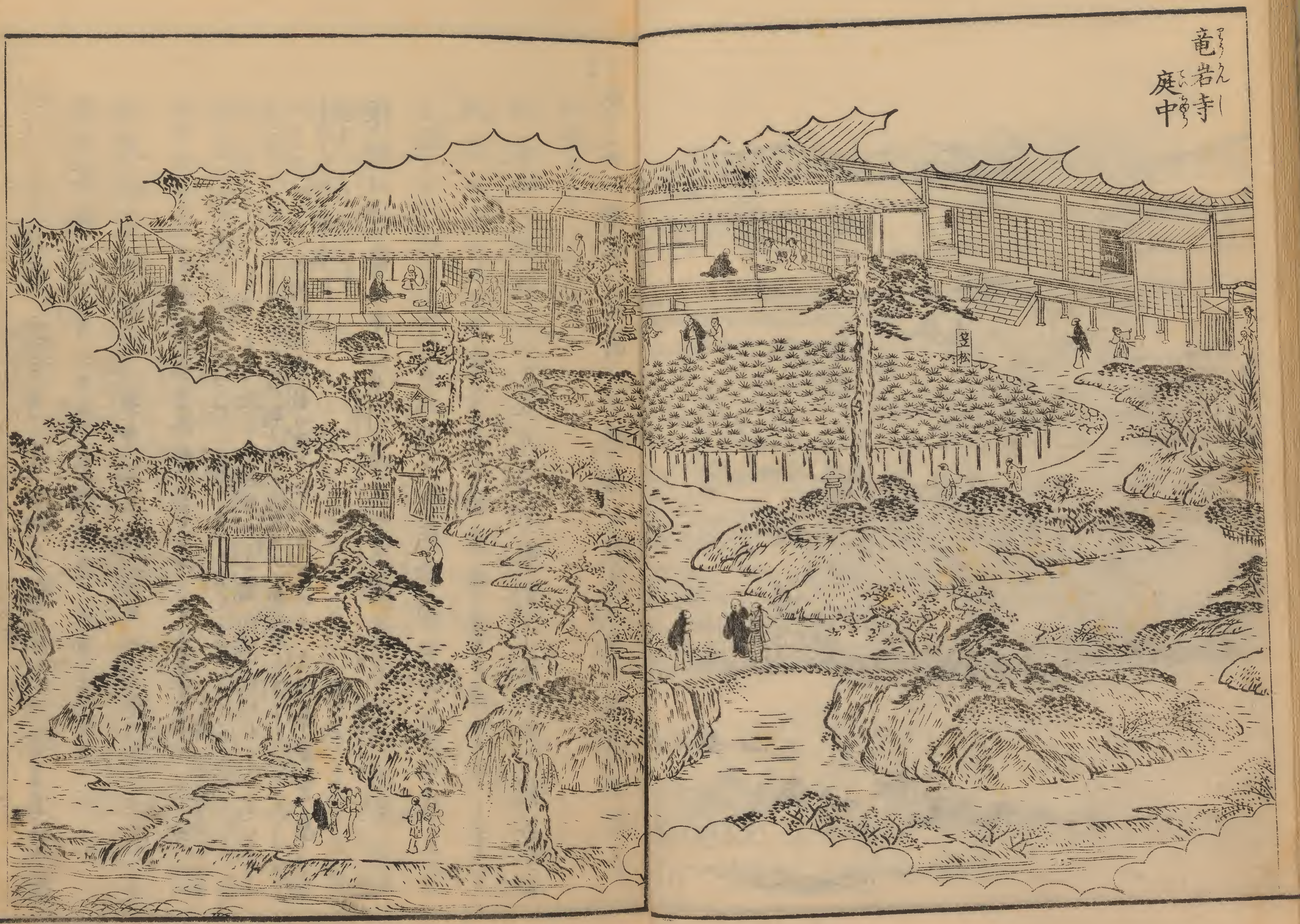
吾妻堤 同所にあり往古の街道の餘波なりとぞ堤の形今も僅に残れり

太神宮 同所御焔硝倉の西の方に有り相傳ふ萬治年間関東大に疫疾流行を冨士の根方より神送りしてこの地に祭りぬ然るに其神輿の中に太神宮の御祓有り依てこの地鎮護の為同所八幡宮の地に祠を建て是を勧請す後此地にうつせしとぞ 神主ハ小川氏なり

遊女の松 同所西に隣る天台宗寂光寺の境地に有り當寺昔ハ麹町の貝塚の地にありしを御城郭御造営の時此地に開基ハ自證大僧都圓雄師なり 始ハ日蓮宗なりしを元禄の頃天台宗に改む今の相傳ふ此地ハ往古の奥州街道にして廣谿の原野なりしに此松樹の鬱蒼として栄茂し遠く見え渡りしかバ霞の松とし號けり寛永の頃大樹此地に御放鷹の時御鷹翦て御氣色あしかりしに此松にとまりしかバ御拳に止る故に御褒賞として其御鷹の名を此松に命せられしを遊女と唱へしと云あふとなり

新日暮里 同所二丁ばかり西南の小川を隔て法雲山仙寿院といふ日蓮宗の寺なり庭をしつらへり此辺の地勢をよひ寺院の林泉の趣谷中日暮里に似て頗る美観なり故に日暮里に相對して假初に新日暮と字せり弥生の頃爛漫たる花の盛りには大に群集せり當寺ハ紀州公御母堂養珠院日心大姉正保紀元甲申草創あり當寺の鬼子母神ハ同大姉甲の延嶺にして靈示を感じ大野の辺にて土中に得られて後當寺開創落成の日安置ありしとなり 同所一町ばかり東南龍岩寺といへる濟家の禪宗の寺の庭中に笠松と称するあり枝のまはり三間あまりひろし


仙寿院（せんじゅいん）
庭中（ていちゅう）
新日暮里
本堂


竜岩寺庭中
笠松

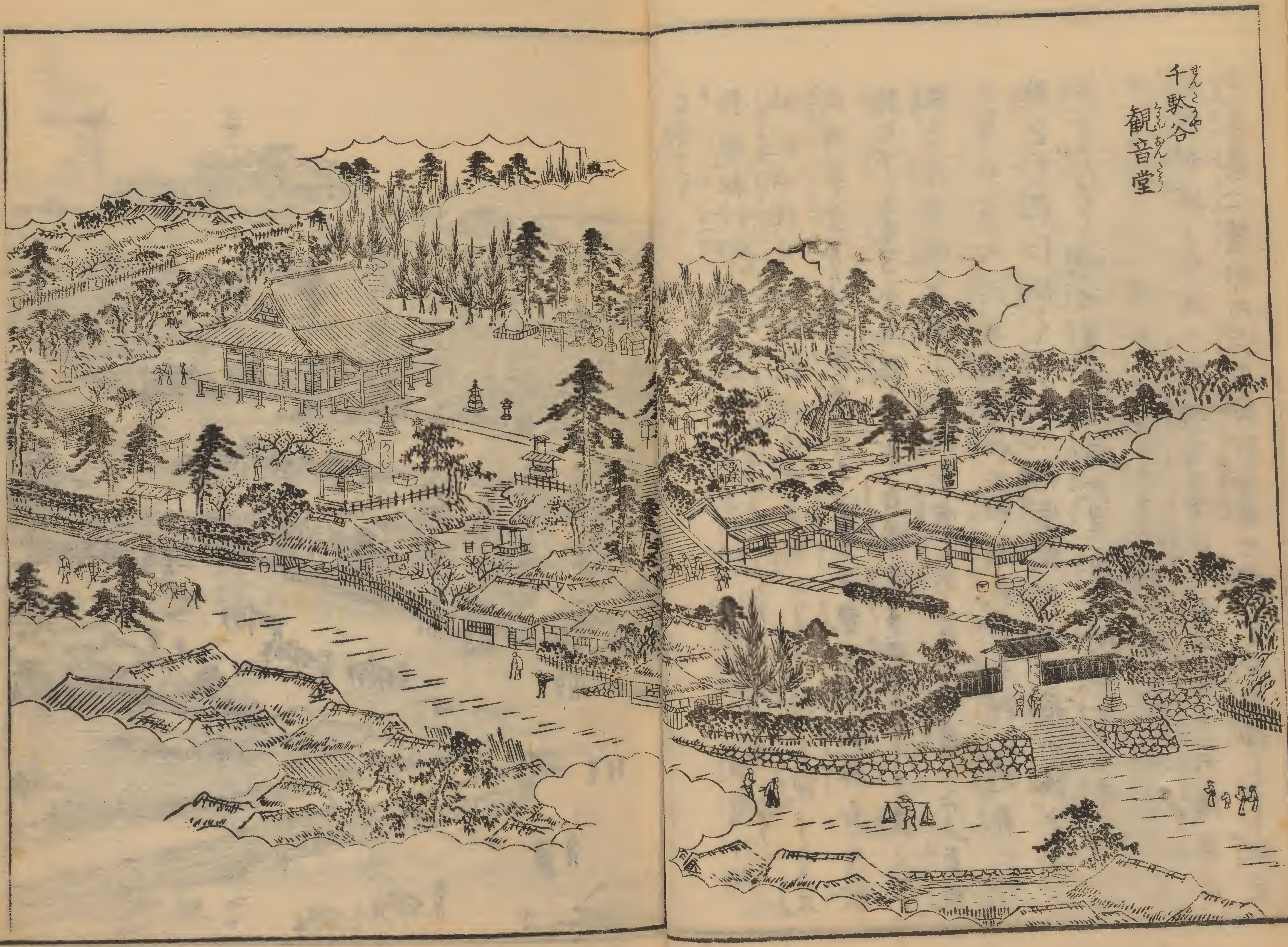
千駄ケ谷観音堂　寂光寺より二町ばかり西北の方にあり 観谷山聖輪寺と号する真言宗の寺に安置せり 本尊如意輪観音は当寺開山行基大士の彫像にして御丈三尺五寸あり 世俗目玉の観音と字しける（往古慶長三年の春盗賊来りて此本尊の双眼は精金なりと云伝へ鑿とりて去んとせしが冥罰にやよりけん自ら持たる鑿の刃にて咽喉を貫きて死せり 此世のこる橋氏某目のあたり是を見て感歎し堂宇を再興す 此故に里民目玉の観音と字したてまつるのよし 按るに縁起ならびに菊岡沾涼翁の説に江戸寺院の中千有余歳を歴るものは浅草寺と当寺とのみといへり）

縁起曰神亀二年乙丑行基大士東国遊化の頃同年初夏に暫く此地に息ひ給ふ時に如意輪観世音傍の谷より出現し給ひ大士に霊示あり 依て仏意に応しかしこにありし古株を仏材として此観尊を彫刻したまふ故に観谷聖輪の号ありといへり

千駄ケ谷八幡宮　同所一丁許西にあり 此辺の惣鎮守なり 例祭は九月廿七日なり 別当は真言宗高雲山瑞円寺と号く

鈴懸松（門前に松の老樹有り寛永の頃大樹此地に放鷹の時御鷹の鈴此松の枝にかゝりしとなり 故に名とすと）

社記云往昔此地深林の中に時として瑞雲現しける 又或時碧空より白気降りて雲上に散す 村民怪しむ彼林の下に至るに忽然として白鳩数多西をさして飛されり 依て其霊瑞を称し小祠を営み名つけて鳩森といふ 貞観二年慈覚大師東国遊化の頃村民等大師に鳩森の神躰を乞求む 依て宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移りし古をおもひて神功皇后応神天皇春日明神等の尊躰を作りて添て正八幡宮と崇め奉り 遂に後久寿年間渋谷正俊領地に鎮座の御神なるを以て金王丸生前随身の本尊恵心僧都の作の弥陀如来の像を本地仏として社を


千駄ヶ谷
観音堂
本堂
弘法大師
別當

千駄ヶ谷八幡宮
富士
浅間社
本社
白山
表門

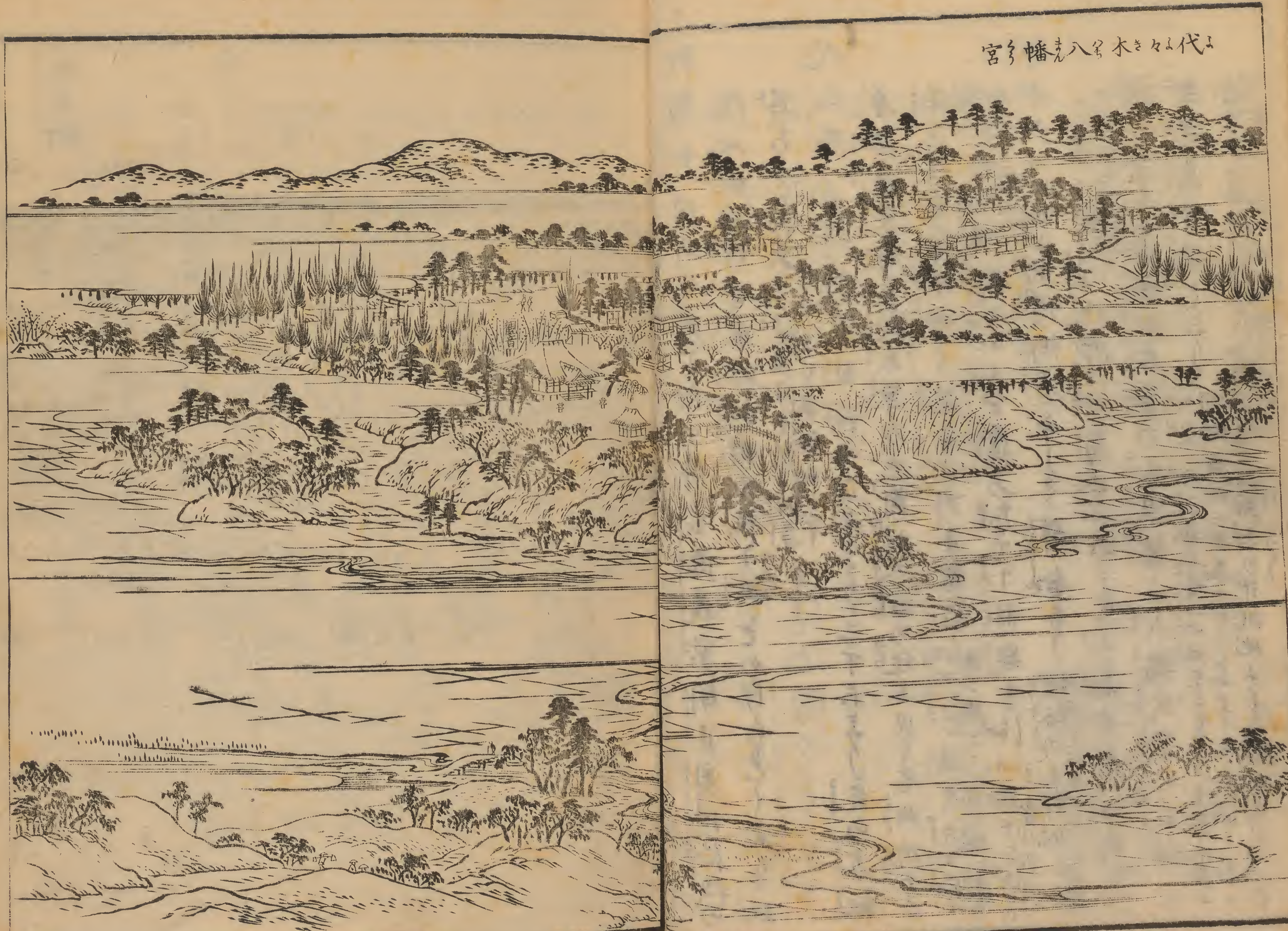
造営して此地の生土神と称し奉りしより霊應ハ赫々として
日々に新なり（南向亭云く當社の前路ハ鎌倉街道の旧跡にして今も鎌倉路と字せり青山の原宿より此地をへて大窪へかゝり）
（北条家分限帳に島津孫四郎所領の中に千駄ヶ谷の名有と）

代々木野八幡宮　同西の方代々木野にあり（此野も武蔵野の中なり）祭禮ハ
九月廿三日に修行す別當ハ天台宗にして宝珠山福泉寺智
妙院と号す（古ハ知明に作る）
相傳ふ當社ハ往古源頼家公の旗下なりける近藤三郎
是茂の家人荒井外記智明といへる者故ありて相州を退き
此代々木野に蟄居し宗友と名を改め年月を送りつゝ八幡
宮ハ本國の産土神なるにより常に尊信怠ることなかりし
然に建暦二年八月十五日の夜夢中に鶴ヶ岡八幡宮の
霊示ありて宝珠のごとき鏡を感得せり依て同九月廿三日
此野に茫漠たりし荊棘を拂ひ小祠を営みて初て鶴ヶ岡
八幡宮を勧請し奉るとなり

鞍懸松　同所の岡に在り傳へ云源義家朝臣奥州征伐の
頃此地に陣を取此松樹の枝に鞍をかけられしより此
名ありといふ（江戸鹿子といへる冊子にハ是を頼朝卿とす）

代太橋　甲州街道萩窪の立場より三丁ばかり先の方松
原赤堤泉廻り代太等の五箇村入合の辻にありて曲折せる
所の道路を横切て流るゝ小川に架す（此所にてハ道より左に添て流るゝ橋より右に添て流るゝ）
橋下にて水流る橋上に土を覆ふて形ハ顕ハに（此橋下を流るゝハ多磨川の上水也）
左右に欄れを

高井戸　此所も甲州街道にして驛舎あり（四谷内藤新宿より此所迄一里廿五丁上石原へハ二里一丁あり八王子へも此所を初り）此所ハ下高井戸にして上高井戸ハ此所より
西にあり小田原北条家の分限帳に大橋氏某の所領に
無連高井堂とあり（無連ハ無礼高井堂ハ此地のことをいふ道興准后の回国雑記に堀兼の井見にまかりけるに今ハ其かたちもなきよしを高井戸とのへとありしとも堀兼の井此地にありや今ハ定かならず其和哥ハ第四巻堀兼井の條下に詳なり）


代々木の八幡の宮

代太橋

鬼子母神 下高井戸の道清月山覚蔵寺とよべる日蓮宗の寺に安置す鬼子母神の霊像ハ宗祖大士の作なりとぞ佛像の脊に建長五年癸丑八月八日日蓮刻之とあり

縁起曰文永八年九月十二日日蓮大士相州龍口にをひて誅に伏さんとせられしをり須一人の老女ありて胡麻の餅を供せしより大士歓喜のあまり建長五年の夏始めて妙法蓮花経の首題を唱へ始めたまひし時廣宣流布の利益のために自ら彫造ありし法流守護の鬼子母神の霊像を彼老女に授らしめ給ふ然るに継余福田村といへる地に安田武左衛門といへる農民あり則老女が裔にして家に此霊像を傳へ持けるに享保十八年癸丑五月此尊像俗家にありて供味に遠しきとて出家の浄行に帰らくべき旨霊示あり依て當寺第十世の僧侶日曜師鎌倉松葉谷妙法寺に在せし頃彼武左衛門此尊像を携へ来り来由を告て日曜師に附属せり然るに日曜師當寺の破壊を歎き寺院再興の為爰に移住せられし頃當寺へ迁しまゐらせしと云

布多里 今所謂布田邑是なり 布田或ハ布多に作る此地布多天神社御制札にも補陀郷とあり

此地ハ甲州街道にして上下と分れたり 石原上下國領等を合て布田五宿と称へ

武蔵國風土記曰 多磨郡

爾 布田或新田公穀三百七十二束三字田假粟

二百十三丸三字田

貢薇蕨諸草菜及膾魚等

亦 布田川出鮎鮒鯽等云云

布多天神社

和名類聚抄曰 武蔵國多磨郡新田〈尓布多〉云云

按に風土記にいふ所の爾布田及ひ和名抄に載る所の新田共に此地のことを云なるへし後世上略して尓布多を布田とよひならハせり又風土記に尓布田川の名あれとも今ハしるへからす

万葉

多麻河泊尓左良須氐豆久利佐良左良尓奈仁曽許能兒乃己許太可奈之伎

家集

手作やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉河の里　定家

按に万葉集多磨を多麻に作る布田も又古ハ布多とす往古麻の布を多く産せしよりの假字にハあれと其意を含て麻布を作るなるへし当國の府ハ此地より西南にあたりて遠からねハ毎国朝廷へ調布を貢せしより國史等に詳なり風土記多麻川の条下に里人調布を作り内蔵寮に納とあり然れハ此國より貢献する処の調布ハ當國に産するものを集め此川辺にてさらして府に携へ國司の検へ出せしなるへし依て多麻川の水流を考ふるに府中の辺より水源ハ河瀬狭く巨石多く布田より下流ハ漸海に近きゆへ潮の盈虚ありて布を曝すに便ならしよろしからす此布田の辺のミ河の瀬の廣狭水流の緩急実に布を曝すによろしと思ハるゝ故に合せ考るに此辺一実の跡ともいふへし又云歳毎三月の頃より七八月に至り此辺の鮎見物人ハ舟をうかへ網をおろし遊ふ事あり

又云
此川の流の末ハとこまてそ布を流さハ海まて
あの子ハヤレ紺屋の子ヤレひつもかまはぬ紺染をさらしぬひひつ深さもせむひ瀬にはくもさらすも晴わたりし山のゆきこそ布にかけて見ゆるハまさしく其の月夜をおもひそよ

又云
猿楽の鶴ハ二三羽まひ日ひかり通ひやる山越えく峯を越えててろか川瀬にかれの用さらしあけさらつくしき都とあまこう
末也こえつゝさくすけ

此唄ひもの云古をおもひあハするに足まり 附て云 此地より西府中まての間に深谷邑と称する地あり 是も古へ紺染の家多くありて潤布をさらしけるにや 此所の名あるなるへし 按るに東鑑建久六年七月廿八日の条下に武藏國潮瀬の別當のことハ安房上野両國に附らる條所別當の事ハ近瀬局これを勤むとあり 又云 和名抄に白絲布を天都久利布と云 調布の三字を用ゆると云々 と誤す 同書に今按るに俗に手作布の三字を用ゆると云 あるも此辺のことをいへるなるへし 按るに豆豉の沼能とありて貢にあれ布のことをいふ

布多天神社 上布多驛舎の辺より右の方四丁はかりにあり 別當ハ真言宗にして廣福山栄法寺と号す 浅尾王禅寺に属す 祭禮ハ隔年九月二十五日に修行す 當社祭神詳ならす 今菅神を相殿に 難に罹るの後今の地へ遷すといへり 今も其地に元天神と称して小祠を存せりといへり

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡
布田天神社云云

虎柏神社 同所北の方十丁計を隔て佐須村にあり 今も社前に古松二株鬱叢と 土人ハの神社といへり その地なりしを後地名に呼ひしとなり 遠き昔此地の鎮守にて 毎年九月十三日を以て祭祀の辰とす

武藏國風土記曰 武藏國多磨郡狛江郷
虎柏神社 圭田七十三束 所祭大歳御祖神也
崇峻天皇二年己酉八月始祭事有之云云

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡
虎柏神社云云
按するに深大寺縁起に満功上人の祖母の名の虎と祖父の住し柏野の名とをとりて虎柏の神社ありといへるハ是非をしらす 今ハ柏字を用ゆ 又當社の南にある七十三束の圭田の耕田ハ吉祥領なりしとて今も宮田と称へり 風土記に挙るものなるへし

虎柏山祇園寺 同所三丁はかり東の方にあり 日光院と号す 天台宗深大寺に属せり 當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功上人開創まする所の佛域なりといへり 本尊ハ立像二尺計の弥陀

青渭社 虎狛社

如来の木佛を安置す（作者未拝）本堂の向拝に掲る所の虎狛山の三大字ハ筆者をしらす

薬師堂 本堂の前右の方にあり 薬師佛ハ立像御長一尺（佛龕の内に弘法大師の真蹟の般若心経を収む）すこふるふるく行基大士の彫造なりといへり 此堂宇二百有餘年ちかき前迄ハ此地より東南の方三四十歩を隔て耕田の中にありしとなり（今に古薬師堂とゆへる地題なり）其頃屢賊の為に佛器の類ひを奪れしかハ終に祇園寺の境内に遷せしとなり（今薬師堂より一丁程南に薬師堂面と字して一反六畝せばかりの除地あり鎌倉時世より前に附せる所なるよし 土人のいひ傳へたり）

狛江入道旧館地 祇園寺より艮の方六七町を隔て二百歩あまりの岡なり 空堀の形など厳然として残れり 此地ハ入道崇むる所の稲荷の小祠あり 土人里の稲荷と称す 祠前樫の老樹一株六圍にあまるもの存せり（東鑑に承元二年戊辰七月十五日狛江入道増西悪黨五十余人を率）ゐて武蔵國威光寺領内に乱入し田を刈狼籍に及ぶ由院主の僧圓海

訴状とのかゝるを挙られ卅本狛江ニ作るハ狛江を誤りとせらるゝものあらん又云
こゝに狛江入道と云伝ふるも此増西のことをいふなるべし又同書ニ建久元年庚戌
十一月七日二品入洛供奉の人名の内に駒江平四郎といふ名を注す
按に續日本後紀に仁明天皇の承和十一年甲子五月武蔵國多磨郡狛江
郷より節婦を出す事を載られたり卅本猪江に作るハ狛を誤れるものか
せり武蔵國風土記残編にも多磨郡の内に狛江郷といへる地名を挙られ此
和名類聚抄にも同じ郡の郷名に狛江とありて古乃江と訓す されど此
地を今ハ佐須村と称ふるにも多磨川の北宇奈根村に隣る駒井邑と
呼ふ地あり恐らくハ狛江の郷の轉訛ならん北条家分限帳に多波川の北
駒井本郷太田新六郎知行の内にあり此和泉駒井の旧地なるべし

青渭神社　虎柏神社より北の方深大寺村の中にあり 土人
此地を字して天神ヶ谷戸といへるも祭神詳ならず世に
青波天神とも称せり 相伝ふ古ハ社前に湖水ありし故
青波の称ありと 社前槻の老樹あり 数百餘霜を経たる
ものなり

延喜式神名帳曰　武蔵國多磨郡
青渭神社 云云

按に神名帳に青渭とあるを今本阿遠伊と訓す 土人云古當社の前ハ湖にして

青滑堤　青滑神社の辺にあり古ハ青滑の湖水湛へりしを後世堤を切開きて水を乾し耕田となすといへり故に今此所彼所に六七歩或ハ十歩にあまれる塚のやうなもの残り存して草樹繁茂せるハ其堤の旧跡なりといふ

浮岳山深大寺　昌楽院と号す深大寺邑にあり（此所も佐須村と云昔ハ柏野里と号せり）大古ハ法相宗なりしが恵亮和尚以来天台宗に改む本尊ハ宝冠の阿弥陀如来恵心僧都の作なりといふ当寺ハ福満童子の宿願によりて天平五年癸酉に草創する所の仏域なり（日本年代配合鈔に曰天平勝宝二年庚寅深大寺建立云云）四十七代廃帝御宇にも勅願所と定られしより平城清和両朝も又勅願所となしたまひしと云

元三大師堂　本堂の前左に傍てあり寺記に云応和四年慈恵大師叡山において自彫刻なし給ひし霊像なりしを慈忍僧都に附して此地に移し給ふ時に武蔵国深大寺ハ代々の帝勅願の地なれバ年の春ここに安置なせし尓来霊験いちじるく月毎の三日十八日殊に正五九月の十八日にハ群参夥しく護摩供を修行あるゆへに遠郷の人群参せり此日門前に市を立る

峯魔尊像　先の霊像と共に叡山より当寺に遷座ましましけると云霊験著し

五大尊石　大師堂の北の際清泉の中にあり土人旱魃の年ハ此所に来り此水を汲干さんとす果して膏雨ありと云

要石　同じ泉水の中島稲荷の宮の傍にあり昔此山崩るる事屢なりしかバ頭の寺主祈念して此石を建て要石と号くと云

鐘楼　大師堂の後の峰上にあり

武蔵國多東郡深大寺
奉治鋳椎鐘長四尺三寸口二尺三寸
右伏以當山蒲牢開基以来華更其數不一或雖右
鋳有破裂而無声或雖討得有薄界而不鳴変緇素
數葦競勠力廼命息氏遂鋳鳴鐘當知三宝垂感諸
天降臨仰願皇風永煽佛日弥明伽藍鎮静法輪
常轉更乞諸檀旋主二世善願一切成就仍昭銘功
徳其辭曰
寺号深大　山名浮岳　新鋳鳧鐘　声形卓犖
百千万劫　定期郷邀　鷲起塵夢　消除煩濁
滅罪生善　令人正覚
永和二年丙辰八月十五日　大工山城守宗光
大行事院主法印権少僧都辨運
別當前大僧正法印大和尚位守慧

亀島辨財天祠　門前左の方の池の中島にあり縁起に所謂福満童子が負て渉せし霊亀を祀して後に満功上人船天に崇られしと云

深大寺

毘沙門天吉祥天社 昔ハ各別の社にてありしを後弁天の相殿に合祭すといふ福満童子ハ毘沙門天の化身吉祥天ハ縁起に云

當所の童女をあがめ祭るなりといへり 縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を

深砂大王社 大門並木に相對す 営みて深大の二字を採て寺号とし一字を草創せしと

社の名によれり 往古深砂大王影向ありし旧跡と

いふ 東照大権現宮及び八幡 深砂大王影向池

八剱権現号を相殿とす

或ハ傳へて池中一つの霊石あり

剱立石 同じ池のほとりにあり往古恵亮和尚當國に勝地を求めたまはんとして當國の國分寺に至り不動の利剱を虚空に擲ちたまひしに此石の

上に立しとゞまりしより此号ありといひ傳ふ 福満童子祠 右の方にあり 深砂大王の祠前 仁王塚 同所社前

の道を一丁ばかり西へ登る坂を塔坂とよべり往古塔ありし故なりといへり

二王塚と字す相傳ふ昔何某の一子當寺二王門の辺に遊びてありしに忽に

姿を見失ひ人々驚き山大に騒動すありしに當寺二王門の二王の唇に

其児の衣服の残り着ありてそれより此児を呑たるに依て里民此二

王の像をとりおろし門を破却し土中に埋めたりしより二王塚の号ありと

いひ傳ふ

縁起曰 聖武天皇の御宇武蔵國多磨郡柏野村に猟師あり

柏野村今佐須村といふ 名を右近といふ年頃山に入水に臨みて殺生を業とせり 此妻

ある時なにとなく女来りて妻となる名を虎といへり

狩漁を止むべし其後一人の娘をまうけつゝかしづきけるに

早く生長なしけり然るに福満と唱ふる童子ありて此娘に逢初て

これハ父母大に怒りをなして賤しき人にあはせんずる本意なりとて

とて二人の中をさけ娘をバ此里の池の中島に家を営みかくしおき

居らしむ福満ハ日毎に岸に至りて是を歎くとのべとかくなしけり 昔

そありしの玄奘三蔵渡天の時流砂川に至りて佛を念ぜしられしハ

深砂王現じまひ川を渉しあたへしことを思ひて一心に念じられしハ

一の霊亀浮び出ぬ福満其甲に乗て島に至り娘にあふことを

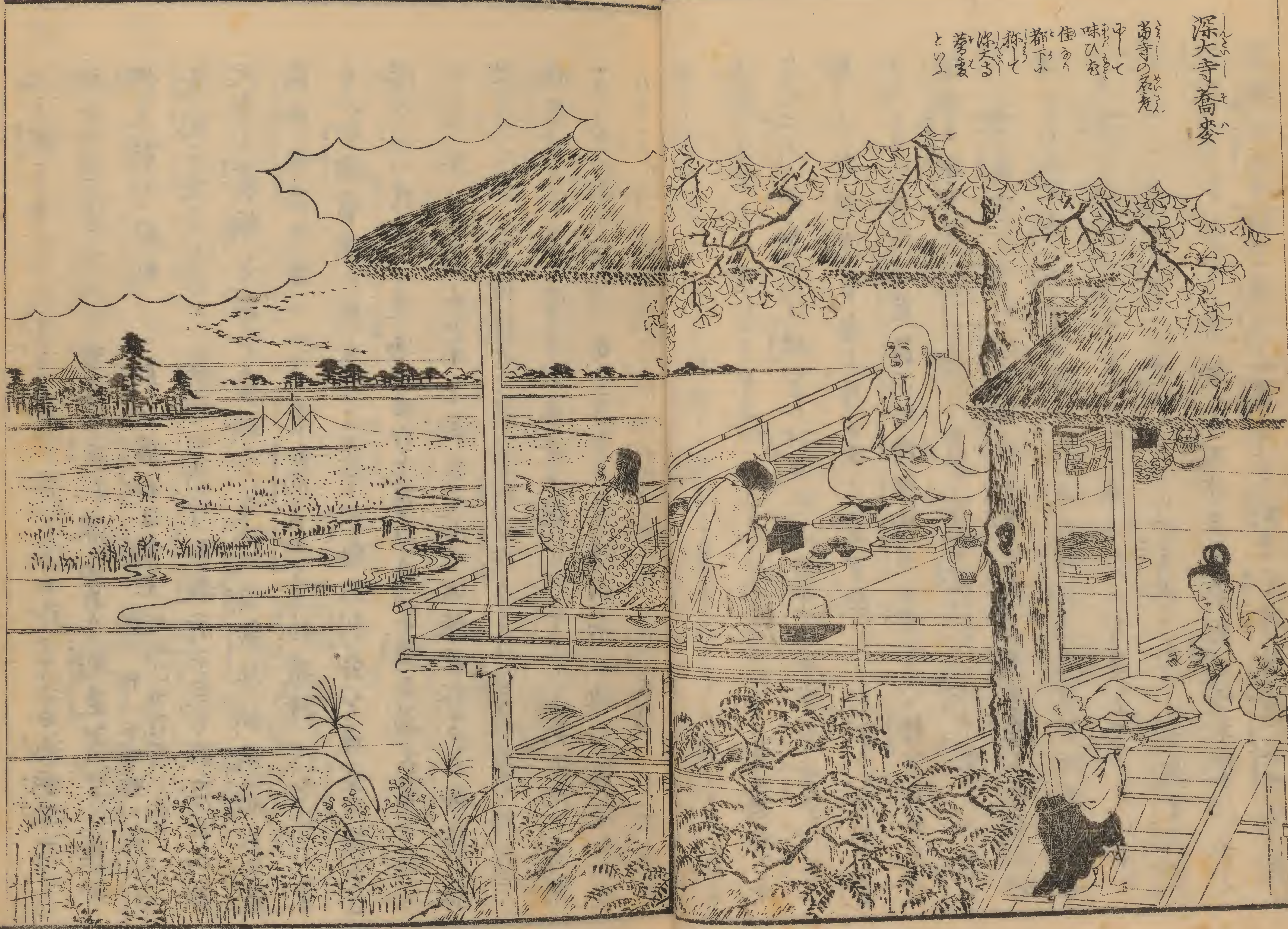
得たり父母後にこのことを聞て神明の冥助あることを知りて随喜

して娘を福満に妻あはせられバ竟に一人の男子をまうく父母の

願ひありて此児出家し満功上人といふ其後唐土に渡り大乗

法相の旨を傳へて帰朝し天平五年癸酉父の本誓により

深砂大王の社を建立し當寺を創せし其時神霊水中に示現岩


深大寺蕎麦
当寺の名産にして
味ひ至て
佳なり
都下に
称して
深大寺
蕎麦
といふ

上に現じ玉ふ上人其尊容を摸しとゞめんと思ひ玉ふに衣木なし然に七月七日玉川に靈木の流れ漂ふあり則是をもつて藥師佛三軀を彫刻し一軀を當社に納む（餘二軀ハ下野國日光山及び出羽國にありといふ）此由叡聞に達しければ　嵯峨帝の御宇勅願所に定られ浮岳山深大寺と震翰を灑き扁額をたまふ又貞觀年間武藏國司藏宗卿叛逆を叡山の惠亮和尚に仰らく乱賊降伏を祈らしめたまふ和尚當國の國分寺に至て不動の利劔を虚空に投たまひ隕る所の勝地を道場とせんと誓ひたまふに遥に飛て當寺井泉の辺の石上に隕ぬ此石を劔立の石と云依て五大尊を勸請し此地に於て祕法を修煉せられしに行力空からず逆徒悉く降伏せり依て叡感のあまり當寺を惠亮に賜ひ此所にて七邑の地を寄附なしたまふ（是を深大寺の七郡と唱ふ）それよりこのかた法相宗を轉じ台宗にうつるなりとぞ（昔ハ十二宇の塔頭ありて大伽藍なりしかど度々の兵火にかゝりて今ハ昔に違へり）其後野火の災に罹りて灰燼となりしを世田谷の吉良家深く尊信して再び堂宇を営み彼平行安の刀をも寄附す（無銘長四尺五寸あり）

繪巻物并詞書二巻　参議右中將藤原公尹卿筆

抑當寺ハ関東融通念佛最初弘通の道場にして慈眼大師　大猷公の上聞に達し奉り融通念佛百遍を受させ賜ひ忝も結縁の名帳に御諱を記させたまひぬ其あらましハ當寺融通念佛の縁起に詳なり（此念佛ハ大原の良忍上人現に如来の示教を蒙り弘通したまふ所なり　そもそも此法や或ハ十返百返乃至千返万返を日課とし我唱ふる稱名の功徳を他の人の為とし他の人の唱ふる稱名をハ自らの為として互に融通し自他平等に修するがゆゑに功徳廣大無辺なりとぞ　昔鞍馬山の毘沙門天王もこの念仏の結縁に入りたまひしよし縁起にくはし）

深大寺蕎麥　當寺の名産とす是を産する地裏門の前わづかに八反一畝程のよし都下に称して佳品とす然れとも真とするもの甚少し今近隣の村里より産するものおしなべて此名を冒らしむるといへども佳なりとす

難波田彈正城址　深大寺大門松列樹の東の方の岡を云土人そ

城山と呼ぶ今ハ麥畑となるといへとも此所彼所に湟池の形残れり此地ハ往古　清和帝の御宇蔵宗卿武蔵國司たりし時ここに住せられたりし旧館の跡なりとぞ天文の頃上杉朝定の家臣難波田彈正忠廣宗松山の城の出張としてここに城廓を構へたりしとぞ

北條五代記曰く上杉修理太夫朝興の嫡男五郎朝定生年十三歳にして家を継武州深大寺といへる古城を再興し北条氏綱に向ひ弓矢の企あり　といへる条下に（此陣ハ天文六年七月廿日なり）されハたけき中にやさしき道ありその日のいくさ大将難波田弾正ハやぶれて松山さして落行を北条の方に山中主膳と名のりけるよせ一首ハかくぞきこえける
あしからしよかれとてこそたゝかはめなにか難波田のうら崩れゆく
と俳諧躰にあざけりしに難波田もさすがなる武士にてかへしをいそがはしく
君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ
我作りか陽に古今集の哥をとりあはせて返答ありしかバ狗のおしみをやあくそ
をあはれみもわりなく主君朝定を館に残し置難波田ハ松山へおちあせしが
浪もこえぬべし身を全くして君につかふるを忠臣の法といふなり作者とのひ功者とや
うけひきぬる勇者ともこそありけめへてりき云々

深大寺城跡　深大寺佛堂の後の方の山續にして其間六七丁を

北条五代記に大永四年の頃氏綱江戸の城を襲ふ上杉朝興ハ逃さりて河越の城に引籠り十余年の春秋を送り迎へぬ河よりか例ならず心ちそこなひて天文六年の卯月下旬世を早く去る嫡男五郎朝定生年十三歳にして家を継あひぬていれハ七々ヶ日の服忌さへ経ずして道をわすれ兵を起し深大寺といふ古城を再興し氏綱へ向て弓矢の企あり
なりとあるハ則此所のことなり

醫王山國分寺　寂勝院と号國分寺村にあり府中より北の方十八町を隔つ當寺ハ天平年間行基菩薩草創ある所にして聖武天王の勅願所なり中興開山を教心阿闍梨と号す
今ハ新義の真言宗なり

藥師堂　本尊藥師如来　脇士日光月光十二神将の像ハ共に開山行基大士の作なり

額　金光明四天王護國之寺　深見玄岱筆

く國ん分じ寺

國分寺
伽藍旧跡

二王門 石階の中腹にあり金剛密迹の二像を置作者未詳 堂林八古のくらの中して舊地ハ半丁あまり南にあり

續日本紀聖武紀曰　天平十九年十一月己卯詔天下諸國國別令造金光明寺法華寺下畧

延喜式弟二十六巻曰　武蔵國正稅公廨各四十万束國分寺料五万束藥師寺料四万二十束梵釋四王料七千七百束云云

東鑑曰　建久五年十一月二十七日一宮并國分寺可修復破壊之旨被仰下云云

同書曰　寛喜三年五月五日任綸旨於國分寺可轉讀最勝王經之由被仰下開東御分國々行然奉行之云云

たのもしな世をわたるとて寶ありて法をかぞふる寺の跡く

稱名院

二王門旧跡 寺前半町あまりを隔てゝ南の方の畑の中に其礎石を存せり

層塔旧跡 國分寺の此し東南半丁あまりを隔てゝあり草樹繁茂せる林の畔の圃なり方九尺あまり六角に礎を居へり往古其塔の中真を收るところのありとく中に径三尺あまり石を畳める空穴あり

古瓦 二王門旧跡の辺り數百歩のあひだ往古の古瓦の破碎せるものあり皆堅密にして形全くしほとんど文様奇なり中にも國分寺の古大伽藍の其地中に殘りし古瓦の中に武蔵國郡の名を

國分寺碑 薬師堂の前右の方にあり碑文ハ服元雄中英先生撰む書ハ河保壽にして當寺法印賢盛建るになり

當寺住古源頼義朝臣同義家朝臣奥州征伐発向の頃とし
當時へ入あひ其頃ハ盛大の寺院なりしと云あまたくの星霜を
経て元弘の兵火に亡ひしを新田家にて再興ありしも兵革の
世終に古に復するなし然るに宝暦年間権大僧都法印
賢盛衆縁を募て新に醫王閣を営建し侍る所の灵像を
安して霊跡を表す今古伽藍の礎石のこ厳然として田間
阡陌の間に埋もれて懐旧の情を催せり 此寺前畑の中にかつてい塚かつけ場とて字せし地あり或人云かつていハ乞食かつけ場ハ頸掛場なるへしと依て按に古へ合戦の後敵方の首級を掛し地なるもハ其傍に乞食など住居してありしかいん歟

冨士見塚 國分寺より西の方五町斗を隔つ此所に登れハ一瞬千
里殊に奇観より東ハ浩茫として限りなく天涯つゝくに地つり
接するを見るのミ中秋の夕月のあかきにハ其草より出て草に入の
古詠に古を想像て感情以りこす此故に幽人騒客こゝに来る

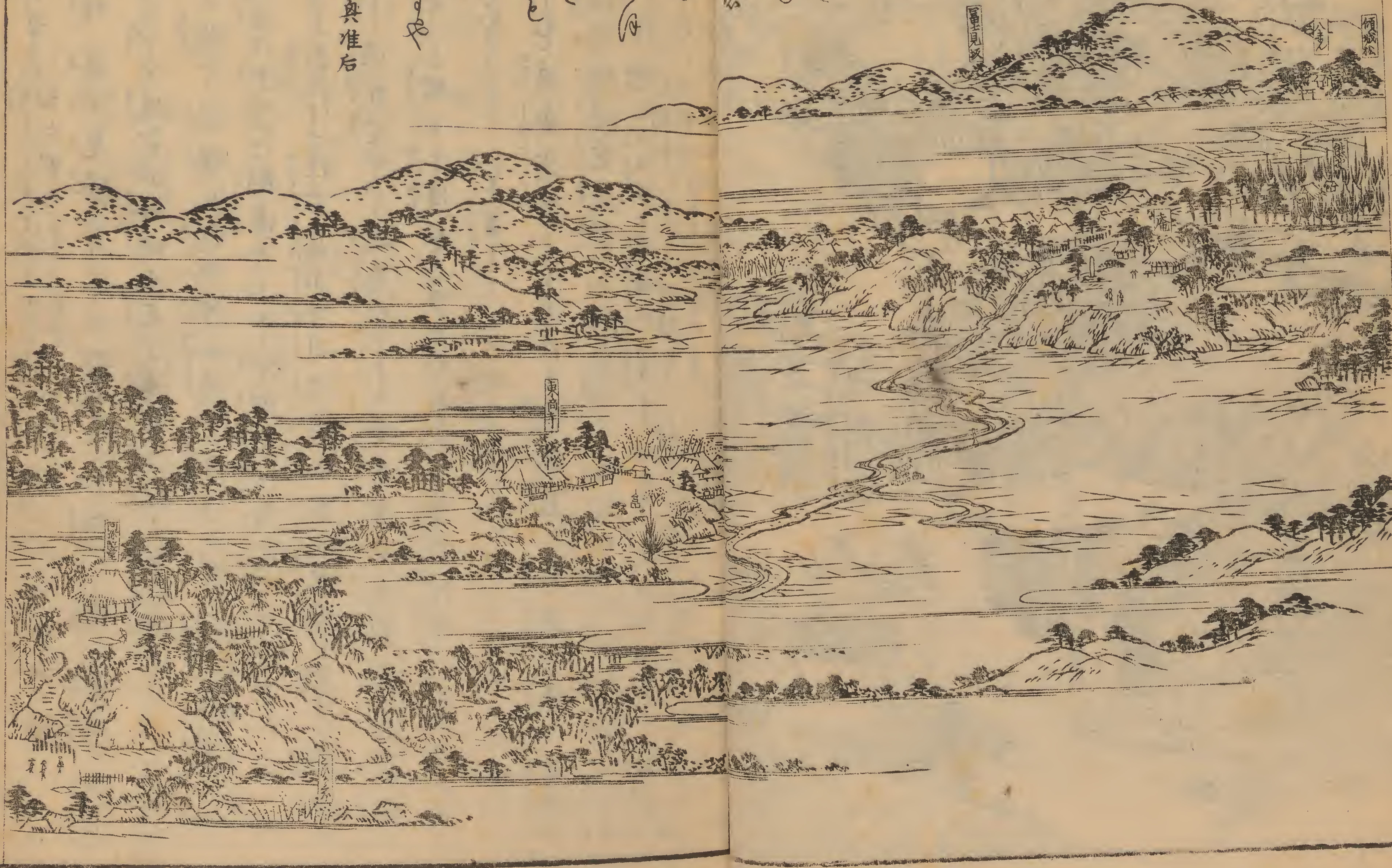
國分寺村
炭かま

恋ヶ窪（こひがくぼ）
阿弥陀堂（あみだだう）
傾城松（けいせいのまつ）
牛頭天王（ごづてんわう）

廻國雑記

恋か窪と
いふ所にて
朽はてし名
残れる
恋か窪
今はた
問も
契
ならすや

道興准后



遊賞せり 五十歩あまり三丈ばかりなり

阿弥陀坂 冨士見塚より十三町あまりを隔て恋ヶ窪村の地北へ向ひて下る坂を云此坂の左に傍ふる岡に草庵あり土人阿弥陀堂と称す木像の阿弥陀如来を本尊とす 延享四年鶴心と云僧此草庵の発起となりと云 土人云古の本尊ハ銅像にして今府中六所宮の社地にあるもの是なりとお傳ふ往古畠山庄司次郎重忠此地恋ヶ窪の駅舎に止りし頃寵愛せし遊君ありしが重忠平家追討につきて西國へ出陣せらる然に其後そこのありて重忠討死しける由いつはりありしを實としかの遊君歎きのあまり終に自殺しけりしを後重忠深くあはれみて彼遊君が節操を感じ菩提の為に此阿弥陀堂建立し銅を以て弥陀如来の像を鋳て安置せしとかや 廻國雑記に云此地に道場畑と字する地あり 土人云むかし此地に無量山[illegible] かつりとりへども手継證文の銘文年号等を考ふるに重忠とは時世大に違ひ誤なるべし 猶六所宮の条下を見るべし

恋ヶ窪 同所坂より下の低き地をいふ古へ東奥北越等の國々より京師及び鎌倉等へ至るの驛路なり其頃は遊女の家居なども多くありていとにぎはしかりしとなり 此地に牛頭天王の叢祠あり竹林の中に凹なる地あるを古への北國街道の旧址なりといへり

廻國雑記 道興准后

恋が窪といへる所にて

朽はてぬ名のみ残れる恋か窪今はたとふもちきりならすや

傾城が松 同所艮の方八幡宮の社地にあり同じ程の古松二株雙立せり土人重忠が愛せし遊君の塚印の松なりといひ傳ふ 然れとも社地なるものゆゑ此八幡宮の神樹なるべし

武蔵野 南は多磨川北は荒川東は隅田川西は大嶽秩父根を限として多磨橘樹都筑荏原豊島足立新座高麗比企入間等すべて十郡に跨る草より出て草に入又草の枕に旅寝は日数を忘れ向ふべき里の遥なり稀代々の歌人秋をしたひ

御入國の頃より昔に引かへ十萬戸の炊煙紫霞とともに棚引
僅に其舊蹟の残りしも承應より享保に至り四度迄新田
開發ありて耕田林園となり往古の風光これなし されど月夜
狹山に登りて四隣を顧望すると猶も曠野蒼茫千里無限
往古の状を想像するにたれり　狹山ハ第四巻の中に入たり

萬葉十四東歌

武藏野爾宇良敝可多也伎麻左氐爾毛乃良奴伎
美我名宇良爾低爾家里

武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與
比欲利世呂爾安波奈布與

古非思家波素氐毛布良武乎牟射志野乃宇家良
我波奈乃伊呂爾豆奈由米

波奈乃伊呂爾低受安良年

武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久毛伎美我麻
爾末爾吾者余利爾思乎

和我世故乎安杼可母伊波武牟射志野乃宇家良
我波奈乃登吉奈伎母能乎

新古今
行末は空もひとつの武蔵野に草の原より出る月かげ　摂政太政大臣

續古今
むさし野は月の入べき峯もなし尾花が末にかゝる白雲　通方

玉葉
旅人の行すゑ遠くなりはてゝひろきむさしのゝ原　右大臣

續千載
むさし野は行ど行末も秋萩の色濃きかぎりしられぬ　よみ人しらず

續後拾遺
末もまたこえぬハ霜もむさし野やくさ葉の露に秋ぞ下草　家隆

新續古今
むらさきのゆかりの色も見えぬみだれて霜むすぶむさしのゝ原　定家

千五百番哥合
若草もゆかりにされハむさしのゝ草はみながらまさりぞする　雅経

夫木
花の色もうつしもそめし妻やこもれるらん一もと薄のむさしのゝ原　為実

回國雜記　むさし野にて残月をながめて
よきしるへのこ添ゆる野ゝの露　道興准后

桂林集　むさし野に長陣せし時とゝきをきゝて
むさしのは本縁も見えん時なる幾日をここに我は鳴らん　直朝

武蔵野紀行
天文十五年仲秋の頃むさし野を見んと此年月心にかけ思ひぬることなれば人々ゆきくらすちつれて小手指かりに出しばしかりんとそ　中略　むさし野をかり行は是ぞ萩薄女郎花の露にまつる野の錦くあそれぞゆかりを見ずにきなり
むさし野といふをさして分入れど行も果しなけれハ
いにしへの草のゆかりもなつかしまれハなれ共
むさしのゝひともとも見えあやなし　氏康
そらのあは我世の中にみ人なれハ立つもよしめしも草の一もと　同

武蔵野の古哥ハ萬葉集をはじめとし代々の撰集歌合おほひろくのせたり[illegible]

武蔵野翁　翁ハ其郷姓詳らずたゞ郁芳門院の一蔵士と云院崩せるの後齢二十九にして世を避て諸國を遊歴し此に止る菴を結び月に臥して武蔵野の廣を愛る六十年を経く西行法師ニ邂逅を一宿を投して通宵古を談じ涙を緇納に灑ぎ暁に追て別る　續扶桑隠逸傳の文意をとる

西行物語　さしてゆくかたもなけれハ月のひかりにさそはれて[illegible]はるばるとむさし野に分入けるに小萩が原の花のなかに[illegible]むさし野の[illegible]ゆくに五六町ばかり入て経をよみ[illegible]人里ハ此末にあり[illegible]萩女郎花のにほひ[illegible]秋の草[illegible]を[illegible]八軸を置[illegible]に[illegible]人あり[illegible]修撰其心とよみ[illegible]仙人[illegible]於閑[illegible]八月十五夜[illegible]月のかけ[illegible]

たゞくらふあしあひさよりまへに作りなれども うらひにあくされ さる
さあふく物ものさま つす あやしくありく 形ありのあたら人のかくくらた
おハもゆかりんと歌ひれとも そうふうのかしうさくめく 家を 都の方とりれ
そのかりあのまのうさゆかしくて かりをへりしうむさし野のなしきさ
ふうさとふく 岑しよりもあつまに見えそくうけ入 將ふあまん うまへてあり
人々作る力もあるうらみりとうさく あか々を作者なりの吟花に ゆかりのあし への
ゆかりげもゆかしくあんとの く八 むらさき郁芳門院の侍の一薦 よせたえなりしう
女院うくれさせ くさまひてのち 出家りしく 國ゝ添竹せし ゆかりの杵ぶ 仏道
深りのかつとし 家ふたよりありと おもひて 廿九の年より まことに六十余
年にふを満足りされハ 讃誦の数 七万余部 かゝりと うらく侍
ゐり名も 郁芳門院の ゆかりも よるかうなゆかりの かのまゝ八 おうらひに
ゆかり うけのとりしを志ほり 名所 をとしく おもえなれ とも あらうき
さく ゑ ゆかりとく

ゆへて 家をさゝのく二のひ 好身とおりてんの月れうけを そかしん
いつまでも世ふあらハ世ハ世をも持くあるりの世をと さらしに おりん
秋ゆさまうのひとうりの名ありなり 隔し来て世に 用をすゝめんとを

紫草　武蔵野の景物とす和名類聚抄無良散岐と訓す
紫ハ最上の色ゆゑに古歌にも兎の色又位の色抔詠あはせ
より根を砕て染るに紫の根深又紫の根摺ともいへり女に
比しては縁の色抔もいへり江戸の紫染ハ最絶妙にして他邦に

延喜式　内蔵寮式曰
紫草二萬二百斤武蔵國信濃國二千八百斤云云
同　書曰　民部省式曰
紫草三千三百斤云云

古今
紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る　よみ人しらす

後撰
むさし野は袖ひつばかりわけしかど若紫はたづねわびにき　同

新勅撰
武蔵野の野中をわけて摘初しむら葉の色ハかはらざりけり　九条右大臣

續古今
むさし野に生ふとし聞ハ紫のその色ならぬ草もむつまし　小町

迯水　武蔵野の景物なり里老云く仲秋の末霖雨の頃此
野を行に凹なる所に水湛へて通ひがたし此所に除彼所にさけて
行に道も定かならず草根沼のごとし故に往来の人吟仙歩行すと云と
此説信ずるに足ざるべし或云天日快明の時曠野陽焔の立に
よりて遠く望めハ草の葉末の風に靡う水の流るゝごとく見ゆるを
いふ依て其所と目指し其辺へ至れども素水流あるにあらず さる

府中(ふちう)
八幡宮(やはたはちまんぐう)
八幡
八幡宿

終に無水の原に至るまでを堤を放に此名ありといふぞよ疑しかるべき

夫木　東路にありといふなる逃げ水のにげかくれても世を過すかな　俊頼

同　むさし野の草葉かくれに行く水の逃げかくれても有りとききしを　よみ人しらず

性霊集詠陽燄喩
遅々春日風光動陽燄紛々曠野
飛擧體空々無所有狂兒迷渇遂忩歸遠而似水近
無物走馬流川何處依下界
運敞註智論曰飢渇問擬見熱氣如野馬謂之為
水疾走趣之轉近轉滅走馬流川皆謂陽炎狀貌也

唐　陸勲志怪錄曰深州東鹿縣中有水影長七八尺
遂望見人馬往求如在水中乃至前不見水

周　處風土記曰廣野中陽餤望之如波濤奔馬謂之
水影此天地之氣綱温盪濁回薄変幻何往不有

按に性霊集を餘前に載る所の書のつまも陽燄の義のみ云なりとぞ先の説を思ひあはすべし　されど今は悉く民居又は田圃に沿革して僅ながらあとをとゞむ

武藏野の勝槩こゝや名不多きゆへにも殊更に聞えて高く凡東西十三里南北十里あまりもやあらん旧記に四方八百里に餘ると書るは筆のあやまりと云へし　天正以来江戸の地を以て御城営民家林藪に沿革して万が一を残せるのみ

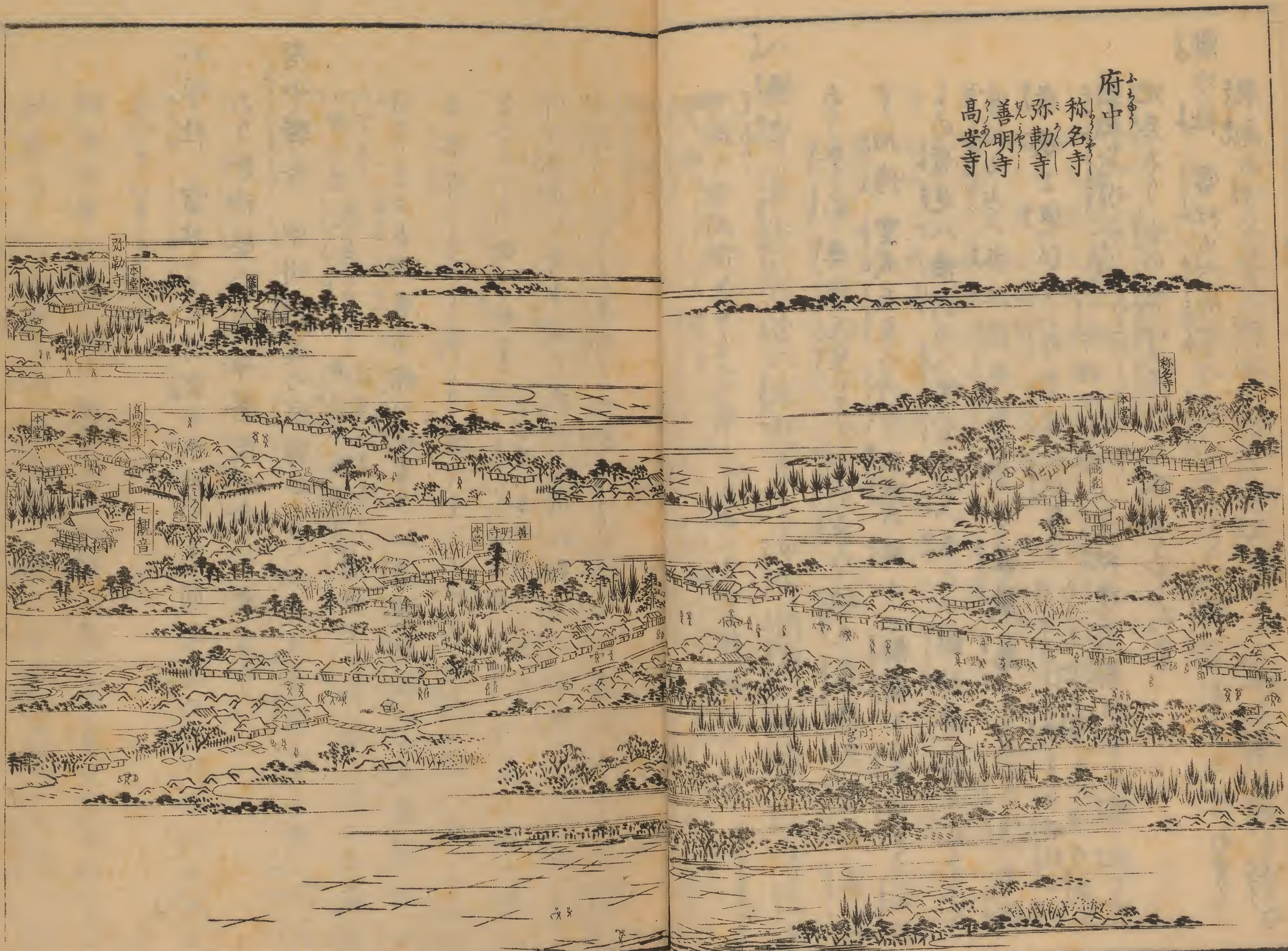
元禄中柳澤侯川越を領せられし頃北武藏野新田開発により下宿といふ地の傍に原野の形勢を残し大野と號ら故に形ようやく絶んとするをあはれみまして千種の花を愛し虫の音を賞せんと中秋の頃幽情をもとむるの輩こゝに遊べり　其行程江戸より十里あまり

八幡宮

府中六所宮の末社なり　甲州街道八幡宿の道より左にあり祭る所　應神天皇なり　六所宮の神主猿渡氏兼帯奉祀す　相傳　聖武天皇の御宇日域の國ごとに勧請し営宮せる所のその皆是八幡村の八幡宮といふ　多くは總社神祠の近きにあり　當社も古は本社禮殿並び建て荘厳ことなりし其後漸く衰敝に及び今は即茅宮小社なり　四十年あまり前までは老杉一株ありて空に聳え千歳の徴とも見えしが其樹明和年間の暴風に吹折て今は其あとのこるを存せり　又社境圃園の中に權ノ正といふ地名あり古の宮守居住の跡なりとぞ

瀧の社

當社も六所宮の末社なり　八幡宮より三町あまり東南の方にあり　祭神倉稲魂大神なり　社の傍に少し斗の



府中 称名寺 弥勒寺 善明寺 高安寺

飛泉あり六所宮の御手洗池と称す毎年五月五日大祭の時
神幸供奉の輩ハ五月朔日より此瀧に浸りて身を清め神事に
たづさはると云

石塚社　當社も又六所宮の末社にして同所南の方代小川の辺に
あり祭神磐筒男命磐筒女命二座なり

府中驛舎　甲州街道の官驛にして江戸日本橋より七里 布田より一里廿七丁 日野へ二里八丁あり 旅舎多し 新宿本宿番場宿等の名あり 舊名を小野縣と称す武蔵國府にて
府にして上古國造居館の地なり和名類聚抄にも武蔵國府ハ
多麻郡にありと載たり徴とすへし延喜延長の頃一変して此辺
をへて小川郷と称す 風土記曰小川郷公穀二百六十七束三毛田貢ハ松桃穀靴之類云々 又其後小野小
川の称止て府中鎮と總称す尚此郡玉川を境とし川南を多
西郡川北を多東郡とも称しゝより古文書にみえたり 常陸對駒見門